

# 日本サッカーにおける指導に関する研究

## ー第1回 FIFA コーチング・スクール（1969）に着目してー

永浦 拓

キーワード：サッカー、指導、第1回 FIFA コーチング・スクール、デットマール・クラマー

### 1. 研究の動機

近年の日本サッカーの国際競技力向上には、他のスポーツと同様に指導者レベルの向上が欠かせなかったと考えられる。

筆者は、指導力がどのように向上したのかに興味を持ち、その過程における重要な存在として、「日本サッカーの父」と称されるデットマール・クラマーが主導した第1回 FIFA コーチング・スクール（1969）に注目した。

そこで、このスクールについて深く知りたいと思い、本研究を行うことにした。

### 2. 研究の目的と意義

第1回 FIFA コーチング・スクールが開催された背景、そしてその実態、さらにそれがその後の日本サッカーにおける指導法、指導制度等に与えた影響について明らかにすることを目的とする。

また、それを通じて、今日の日本サッカーにおける指導の是非について検討するための手がかりを示すことを意義とする。

### 3. 先行研究の検討

クラマーの指導や、第1回 FIFA コーチング・スクールについて考察した研究には、青山健太（2008）、金子翔一（2010）がある。しかし、これらはあくまでクラマーの指導について技術的な部分に着目して考察しているに過ぎず、日本サッカーにおける指導レベルの向上に関連付けて、第1回 FIFA コーチング・スクールに着目した歴史研究は見られなかった。

### 4. 研究の課題と方法

次の3点を検討することを本研究の課題と方法とする。

1) 第1回 FIFA コーチング・スクール開催の背景（第1章）

第1回 FIFA コーチング・スクール開催の背景として、開催までの流れを明らかにする。

2) 第1回 FIFA コーチング・スクールの実態（第2章）

1) で明らかになった背景を踏まえ、第1回 FIFA コーチング・スクールの実態を明らかにする。

3) 第1回 FIFA コーチング・スクールが及ぼした影響（第3章）

2) で明らかになった第1回 FIFA コーチング・スクールが、その後の日本サッカーに与えた影響について検討する。

### 5. 本論

#### 5.1 第1回 FIFA コーチング・スクール開催の背景

第2次世界大戦後、日本サッカーは国際舞台で結果を残せず、衰退していた。1964年東京オリンピックを控え、1960年に初の外国人コーチとしてクラマーが招聘されることになる。彼は来日後、日本サッカーの現状に危機感を覚え、改革を決意する。周囲の関係者は彼を非常に高く評価し、彼のノウハウは全国に普及した。また、1964年東京オリンピックでベスト8という結果を残したことで、彼は世界からも注目される存在となっていく。

当時 FIFA 会長のラウスは、アジア等サッカー後進地域の指導者養成に注力しており、実力が認められ 1967 年に FIFA コーチに就任したクラマーも、同様にその必要性を痛感していた。両者の意図が合致したことが、スクール開催に

繋がったといえる。また、日本蹴球協会も、指導者陣容拡大のために大規模な講習会を画策していた。その中で、協会はクラマーに対して全幅の信頼を置いており、同時にクラマーも日本に対して特別な思いを持っていた。この両者の絆が、最終的に日本が開催地を引き受け、開催に向けて尽力した最大の要因といえよう。

## 5.2 第1回FIFAコーチング・スクールの実態

第1回FIFAコーチング・スクールは、一流サッカーコーチ養成を目的として、1969年7月から10月までの3ヵ月間、千葉県の大塚グラウンドで開催された。アジア12ヵ国から42人(日本人12人)が参加し、9月までの講習後、10月に試験が行われた。講習は、1日に実技と講義を4時間ずつ、計8時間の厳しいスケジュールで行われ、実技に加え、指導理論や組織論、科学的知識、他球技など、充実した内容で構成された。

スクールの特徴としては、実技を実践し、選手に見本を示すことのできるコーチを育てることを最も重視していたことが挙げられる。

このスクールに対しては、最初から肯定的な意見を持つ者ばかりではなかったが、徐々にクラマーのやり方が認められ、彼は指導者の模範として尊敬された。

結果として、一人も離脱することなく受講者42人全員が試験に合格し、世界初のFIFAコーチ・ライセンスを取得した。

## 5.3 第1回FIFAコーチング・スクールが及ぼした影響

第1回FIFAコーチング・スクールを模範として、1970年から、JFAコーチング・スクール、リーダー認定講習会という二つの新たな取り組みが展開された。これらに合格した者には公認のライセンスが与えられ、「リーダー→コーチ」という指導者の認定段階が構築されることになる。

また、その他の取り組みとして、第1回FIFAコーチング・スクールを契機に、指導者海外研修(1973)が開催されている。

日本サッカー協会では、指導者制度の更なる改善を検討する中で、日本体育協会公認スポーツ指導者制度(1977)が制定される。これに準じ、「リーダー→コーチ」の図式を基礎に、「リーダー→コーチ→上級コーチ」という3段階の認定制度が完成した。

このように、第1回FIFAコーチング・スクールは、新たな指導理論の普及や、次世代の指導者育成に影響を与え、今日の日本サッカーにおける指導者制度の礎が築かれる要因になったといえる。

## 6. 結論

本研究では、先行研究には見られなかった以下のような新たな知見を加えることができた。まずは、第1回FIFAコーチング・スクール開催の背景について詳細に明らかにしたこと。次に、受講者の視点を取り入れることによって、このスクールの実態についての考察を深めたこと。そして、このスクールがその後の指導者制度など、日本サッカー界に及ぼした影響について明らかにしたことである。

これらを踏まえ、第1回FIFAコーチング・スクールは、その後の日本サッカーにおける指導者育成、そして指導者制度の確立に大きく貢献したといえる。また、その内容についても、実技指導能力の重視など、今日の指導の在り方について考える際に参考にすべき点があると考えられる。

## 7. 今後の課題

クラマーがFIFAコーチ時代にアジア各国で行った巡回指導や、第2回、第3回のFIFAコーチング・スクールの内容について検討すれば、アジア、そして世界の状況も把握でき、さらに深い考察ができると考えられる。加えて、第1回FIFAコーチング・スクールの受講者が、その後具体的にどのような活躍をしたかについて明らかにすれば、このスクールが及ぼした影響についての考察を深めることができると考えられるため、これらを今後の課題とする。